

環境文明社会づくり あれこれ(18)

源流(18)

これまでかなり長いこと、OECD 日本政府代表部時代に経験し、学び、感じたことを書き継いできた。今振り返ってみると、私の30代中ばの3年間は、かけがえのない時間であったと噛みしめているが、書いてきたことの外にも、貴重なものは山ほどある。パリで知り合った友人との勉強会、旅、プチ・ロマンズ…。しかしこんなことを書き出したら切りがないので、今回と次回で今でも忘れられない二つの活動を紹介し、パリでの生活とは一旦お別れしようと思う。

まず一つ。代表部暮らしは、東京・霞が関時代と比べ、自由に使える時間に恵まれていたので、読書の時間も沢山とれたことだ。パリに持参した本の中には、ローマクラブの『成長の限界』やシューマッハーの『スモール・イズ・ビューティフル』などがあり、特に『成長の限界』には大いなる刺激を受け、何度も読み返した。そのうちに、読むだけでなく、自分でも関心を持ち始めていた、世界人口の増加が環境に及ぼす影響を探りながら、この地球がいっ

たいどのくらいまでの人口を安全に収容できるのか、つまり「地球の定員」を推計する作業に取り組んだ。

とはいっても当時は、スマホはもとよりパソコンもない。この作業に必要な統計や文献にも事欠いたが、それでも大胆な仮説を立て、考察を重ね、「人口および環境問題の将来」と題する手書きの長文の論文にまとめ、東京にあった公害対策専門の出版社に郵送し、雑誌『公害と対策』の1975年12月号に掲載された。今から47年前に書いたものだが、今読み返しても、「悪条件の中で、我ながらよく書けている」と一人で満足している。(前回に紹介した拙著『豊かな都市環境を求めて』にも収録されている)。特に「地球の定員」の推計には、現在のエコロジカル・フットプリント方式と似た手法で算定し、80億人と見積もった。但し、この当時には、オゾン層の破壊、地球温暖化、生物劣化などは、政治経済上の問題としてはまだ浮上していない中での推計であるので、この「80億人」そのものは一試算の域を出るものではないが、結果として、ギリギリだがほぼ妥当な数

加藤 三郎

字だと、今も考えている。

もう一つ。OECD 環境局にはしばしば顔を出していたこともあり、皆と親密な関係を築けた。局長はアメリカ人で物理学者のロドリックさん、次長はフランス人で経済学者のプルーダムさんであったが、赴任3年目のある日、二人に呼ばれ、「OECD として日本の環境政策レビューをしたいと考えている。その理由は、日本は戦後、急速に経済成長し、深刻な公害被害を出したが、60年代半ば過ぎから、あまたの立法措置、自治体と立地企業との公害防止協定、公害被害者救済制度などユニークな政策を矢継ぎ早に取り、政府も企業も信じられない程の公害防止投資をした。にもかかわらず、日本経済は力強く成長を続けている。それは何故なのか、加盟国の政策当局者とともに日本を訪問し、現地で主要な関係者とも会い、環境委員会として結論を得たい。この意向を日本側に伝え、政府としてこのレビューを受け入れてほしい」とのことであった。(この項、次回に続く)

